

色嗜好と自己イメージとの関連： 色イメージと自己イメージのマッチ度評定を手がかりとして

Relationship between Color Preference and Self-image: Judged Concordance between Color Image and Self-image

羽成隆司 Takashi Hanari 相山女学園大学
高橋晋也 Shin'ya Takahashi 東海学園大学

Sugiyama Jogakuen University
Tokeigakuen University

Keywords: 色嗜好、自己イメージ、自己表現

1. はじめに

色嗜好と自己イメージの関連はしばしば指摘されるところだが(高橋・羽成, 2005)、この問題を実証的に検討した研究は少ない。色が本来持つ表現機能を鑑みれば、人が特定の色への嗜好を形成し表出する心的過程において自己イメージが果たす役割は大きいと推察される。本研究では、この問題への最初の取り組みとして、色イメージと自己イメージのマッチ度評定を手がかりとして両者の関連性を調べた。

2. 方法

(1) 調査対象者

169名(男性69名、女性100名;平均年齢19.7歳)のデータを分析した。

(2) 色刺激

赤(5R 4.5/14)、橙(10R 6/11)、黄(5Y 8.5/12)、黄緑(5YG 6.5/9)、緑(5G 4.5/10)、青(2.5PB 4/11)、紫(10P 4/11)、ピンク(5RP 6.5/9)、茶(7.5R 4/6)、白(N9.5)、灰(N5.5)、黒(N1.5)の12の印刷色が6mm×16mmの大きさで呈示された。

(3) 調査紙

色嗜好評定、色イメージと自己イメージのマッチ度評定(以下、マッチ度評定)とも、同じ視覚アナログ尺度(Visual Analog Scale)を用いて行われた。各色刺激の横に130mmの水平線が引かれ、色嗜好評定では左端が「100%嫌い」、右端が「100%好き」、マッチ度評定では、それぞれ「100%合わない」、「100%合う」と指定された。どちらの評定も、色刺激の並び順を異にする4種類の評定用紙が作成された。

(4) 手続き

調査は授業時間の一部を用い集団実施された。記憶による回答バイアスを避けるため、はじめに色嗜好評定を行い、その5週後に予告なくマッチ度評定を行った。色嗜好評定では「各色刺激を好

きと感じる程度」を、マッチ度評定では「各色刺激から受けるイメージと自ら感じる自己イメージがマッチすると思う程度」を、それぞれ線分上にスラッシュを書き入れることで回答させた。

(5) データ処理

両評定用紙ともスラッシュ位置を計測後、左端が0、右端が100となるよう得点化し、それぞれ各色に対する色嗜好評定値、マッチ度評定値とした。さらに著者らの先行研究に倣い、対象者ごとに各色に対する評定値の平均値、標準偏差、最大値、最小値、偏好度、偏嫌度を求めた。

3. 結果

(1) 色別評定値

図1に各色刺激に対する色嗜好評定値とマッチ度評定値を、それぞれ男女別の平均値で示す(横軸は色嗜好評定値の全対象者平均の順)。

(2) 両評定の相関

調査対象者ごとに、各色刺激に対する色嗜好評定値とマッチ度評定値のピアソンの積率相関係数を求めた。その結果、係数は.977～-.754の範囲に及び、平均値は.431、中央値は.496であった。男女別の平均値は、男性.372、女性.472であり、この差は有意傾向であった($F=3.77$, $df=1,167$, $p=.54$)。

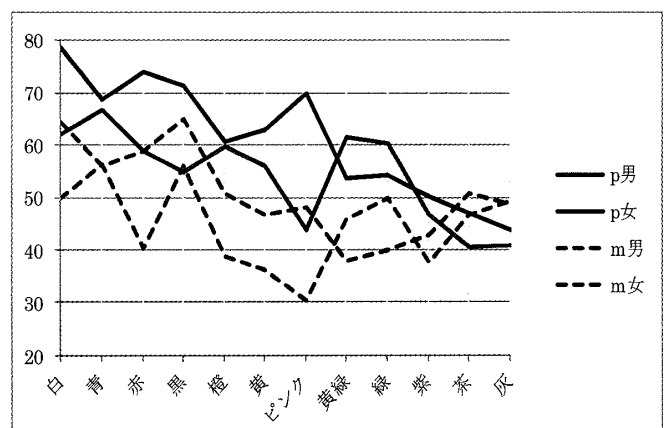


図1 色嗜好評定とマッチ度評定の男女別平均評定値；p 色嗜好評定、m マッチ度評定

表1 各個人の嗜好－マッチ相関と12色別の色嗜好評定値ならびにマッチ度評定値との相関係数
(* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$)

	色嗜好評定	マッチ度評定
白	.181*	.353***
青	.103	.139
赤	-.070	.247**
黒	.280***	.148
橙	-.066	.146
黄	-.043	.121
ピンク	.035	.013
黄緑	-.240**	-.037
緑	-.120	.065
紫	-.084	.058
茶	.096	-.086
灰	.112	-.082
平均値	.042	.215**
標準偏差	.181*	.152*
最大値	.192*	.125
最小値	-.020	-.025
偏好度	.138	-.050
偏嫌度	.069	.224**

(3) 嗜好－マッチ相関と色別評定値の関係

前項(2)で求めた相関係数と12色別の色嗜好評定値ならびにマッチ度評定値との積率相関係数を求めた。表1に結果をまとめる。

4. 考察

まず、12色に対する色嗜好評定の結果について、同じ色刺激を同じ評定法で測定した高橋・羽成(2008;ただしデータ取得は2005年)の結果と比べると、上位4色の顔ぶれは変わらないものの、黒に対する嗜好の減退が目につく(全体平均で73.4の1位から64.6の4位)。とくに男性では54.9で8位に止まった。また、嗜好の性差(女性>男性)という点では白とピンクは旧データから同じ傾向だが、今回、赤の性差が際立っている。数字の上では、女性の赤嗜好が大きく上昇していることが原因である(61.2の5位から73.9の2位)。

つぎにマッチ度評定の結果について、色別に見ると、先に嗜好の減退を指摘した黒が僅差ながら全体で1位に位置すること、また嗜好では最下位を争う茶と灰がそれぞれ5位、6位と健闘していることが注目される。この傾向は、茶や灰に対す

る嗜好度が一般に低いにもかかわらず、服飾の色としては頻繁に用いられていることと合致する。性差については概ね嗜好の結果と一致するが、嗜好では性差のない橙がマッチ度では女性(50.8)が男性(38.8)を大きく上回っている。

「好きな色だから自分に合う」、あるいは逆に「合う色だから好き」という認知過程の存在は容易に想像されるが、そのような傾向には個人差もあろう。結果(2)で求めた各個人の両評定間相関はその一つの指標であり、色嗜好形成/表出における潜在的な自己参照度を示していると考えられる。表1からは、この自己参照度が高い個人ほど嗜好では黒を好み黄緑を嫌う、マッチ度では白と赤を高評価する傾向が見て取れるが、いずれも平均値自体の性差と対応しており、男性より女性の自己参照度が高いという結果に帰される部分も含まれよう。また、マッチ度における平均値と偏嫌度(最小値色を他色から突出して低く評価する程度)とも正相関があるが、ここでも両指標とも有意な性差がある(平均値:男性44.8,女性50.8、最嫌色:男性33.9,女性41.3、ともに $p<.001$)。

5. 結論

男女大学生を対象に、12色の色刺激に対する色嗜好評定と自己イメージとのマッチ度評定を求め、両評定値間の関係ならびに各色に対する反応傾向を検討したところ、以下のことが示された。

- 1) 各色に対する嗜好とマッチ度の評定結果は全体的に似通った傾向にある。また、性差の現れ方も概ね一致する。
- 2) 両評定値の相関、すなわち色嗜好における自己参照度の程度は男性より女性で高い。
- 3) 白と赤に対するマッチ度評定が高い個人、12色に対するマッチ度評定が全体的に高い個人、また「もっとも合わない」と思う色を突出して低評価する個人ほど色嗜好における自己参照度が高い。ただし2)で述べた性差に帰される部分もある。

今後は、色嗜好における自己参照度との関連が予想される個人特性(たとえば自己開示傾向や色認知特性)とも絡めてさらに検討を続けたい。

参考文献

- 1) 高橋晋也・羽成隆司: 色嗜好表出における認知要因, 日本色彩学会誌 29 (2005) 14-23
- 2) 高橋晋也・羽成隆司: 色嗜好表出における認知要因(2): 手続き変更による既報知見の一般化の試み, 日本色彩学会誌 32 (2008) 282-289